

2015 年度
卒業論文・卒業制作集

2016 年 3 月

慶應義塾大学法学部政治学科

塩原良和研究会

指導教員より

2015年度の塩原ゼミは僕が特別研究期間をいただいたため、7期生のみなさんだけで開講されることになりました。そのうえ就職活動のスケジュールが遅くなったため、卒業論文指導に取り組む時間が大幅に削がれてしまいました。こうした事情から今年度のゼミ活動では、みなさんの負担をなるべく減らしたいと思っていました。けれどもみなさんの努力のおかげで、フィールドワーク、フィールドトリップ(ゼミ合宿)、入ゼミ関係、OBG会など、例年通りの充実した活動になりました。特にフィールドワークでは、鶴見よる教室は「居場所」としての落ち着いた雰囲気が出てきて、市立川崎高校定時制との関わりという新たな活動も始まりました。僕自身が諸事情で、現場にあまり行けなかったのが残念です。みなさんの取り組みは、8期生のみなさんにきっと受け継がれていくと思います。

そして、卒業論文研究です。就職活動のスケジュールのこともあるので、なんとか全員に提出してもらえれば、くらいに考えていました。しかしこの論文集を読めばわかるように、どの研究成果も、読めば書き手の人柄が頭に浮かんでくるような、個性的で水準の高いものになったと思います。みなさんの論文の完成にメドがたってきた時期がやはり例年より遅くなったため、『政治学研究』への推薦は残念ながら見送らせていただきました。しかし、それはみなさんの研究成果の質が低いためでは決してないことを明記しておきます。

2015年度は、日本でも世界でも、現代史的にみて重要な出来事がいくつも起こった1年間でした。そのような時期に学生生活を過ごしたことが、みなさんの人生にとって何を意味するのかはまだ分かりません。ひとつだけ言えること、それは、社会はますます複雑になっており、その複雑な社会で自分らしく生きるためには他者への想像力を磨くことが必要なのだという、みなさんに何度も繰り返し伝えてきたメッセージです。なぜなら自分の居場所を必要としない人間などいませんし、その場所はつねに他者と共有されているのですから。その他者が目の前にいようが地球の反対側にいようが、かれらがいまどんな状況にいて何を思っているのかを少しでも多く知ろうとしなければ、僕たち自身の居場所は時代の流れに吞まれて、たちまち劣化していつてしまうのですから。他者を「ほんとうには」知ることはできないのだという事実を直視しながら、絶望せずになお知ろうしつづけることでしか、自分自身についてより深く理解することはできないのですから。

健康にはくれぐれも気を付けて、そして心にゆとりをもって、楽しく日々を過ごしてください。これまで本当にありがとう。さようなら。

2016年3月
慶應義塾大学法学部教授
塩原良和

2015年度卒業論文・卒業制作一覧

日本における外国につながる子供たちへの教育支援問題
有賀 彩織

アイヌ民族と先住民族教育
熊谷 康汰

多文化社会における“自由”とは——Charlie Hebdo 事件の示唆
飯塚 崇矩

日本のイスラム教徒
松坂くるみ

「孤独」の東京学——映画のなかの都市風景
鈴木 脩大

今後の日本社会におけるホテルの可能性
——少子高齢化、新規開業ラッシュ、宿泊形態の多様化への対応
板橋 瑛美

新聞報道における女性アスリート表象の変化
大西 菜穂

〈音楽の力〉の可能性
田代 静

ダイバーシティマネジメントによる、よりよい障害者雇用の可能性
——スワンベーカーを例に
永岡 拳治

「日本人らしさ」から見るサッカー日本代表の変遷
仁保 麗

高校進学先へ 「出口」につなげる取り組み
——神奈川県定時制高校の事例から
田中 瞳子

地域社会における在日中国人との共生のあり方の考察——豊島区 池袋の街を事例に
岩田 陽介

日本の国際児とメディアイメージ
平野 玲奈

多文化を生きる子ども
永田さくや

(学籍番号順)